

# 個人空間の「異方性」に関するフィールド研究

堤 雅 雄\*

A field study on the anisotropy of personal space

Masao TSUTSUMI

## I. 序

電線上で憩うスズメ達が、まるで計ったかのように等間隔で並んでいる光景を目にすることがある。夏の京都鴨川の岸辺に集うアベック達も、何故か奇妙に一定の距離をおいて座っている。

動物に限らず人間にも、それぞれの身体の周辺をあたかも「泡」(Hall, 1966)のように包んでいる不思議な緩衝空間がある。この空間を他の個体が侵すのは、親愛であれ憎しみであれ、相互の關係に特別の情動的負荷をもたらすことを意味する。

個人が有している、他者の侵入を許さぬこの目に見えぬテリトリーとしての防衛領域を個人空間 (personal space) と呼ぶ (Sommer, 1959)。ひととひととの關係が複雑になり、お互いの物理的・心理的「距離」が計り難くなっている現代、これに関する心理学的研究も盛んになっている。

Hallも強調しているように、個人空間は動物的本能にも通底する、人間の生物学的本質に根ざすものであると同時に、対人關係の質というすぐれて文化的な、隠れた構造を反映

すると考えられる。したがって、個人空間の大きさは性によって、年齢によって、そしてなにより文化によって変動すると考えられる。しかし方法論的問題もあり、このような質的な差違を、関数的關係の形で定量的に確認するにはいまだ至っていない (渋谷, 1990)。

この意味で、非常に興味をそそられるのが、Fisher & Byrne (1975) の「快適というには近すぎる」という題の、個人空間の侵入に関するフィールド研究である。彼らはBaxter (1970) の、女性は男性に比べより接近した対人距離に耐えうる、即ち女性は男性より個人空間が小さいという結論について、実は男性と女性では、側面か正面かという方向性に異なった意味が負荷されているんだという仮説を加味して再検証するため、大学の図書館で1人で学習中の被験者のテーブルに、実験者が敢えて着席するという侵入実験を行なった。

結果は、取り扱った3つの独立変数中、侵入者の性を除く2つの変数、被験者の性と侵入者の位置の交互作用が、全ての従属変数において一貫して有意にみとめられた。即ち、侵入者の性にかかわらず男性の被験者は、侵入者が隣に座るより正面に座る時により否定的な反応をするのに対し、女性の被験者は逆

\* 島根大学教育学部教育心理研究室

に、隣りに座った侵入者に対しより否定的な反応を示したのである。この傾向は、個人空間の障壁として機能すると解される、持ち物をおく位置についても同様に観察された。男性では前方に持ち物を置くことが多いのに対し、女性は側方に置く傾向が大であったのである。

この結果について、Fisherらは次のように解釈している。社会化の過程で男性は相対的に競争的存在たるべく、女性は親和的存在たるべく求められてきている。一方、見知らぬ他者による正面からの侵入は攻撃的動機を意味し、側面からの接近は「不当な」親和的動機を意味している。従って男性は正面からの個人空間への侵入に（恐らくはその視線の脅威に）、女性は側面からの身体的接近に、より不安と緊張とを感じるのであろう、と。

本研究では、Fisherらのこのような個人空間の、性による「異方性」についての知見を、日常生活ではさしたる混雑や密集もなく、一

歩外に出れば広々とした、というよりむしろ「過疎」とさえ呼ばれる自然環境を有する地方で生活する、日本の一地方国立大学の学生を対象に、観察と実験を通して検証するのを主たる目的とし、あわせて個人空間の一般的諸特性についての考察を、探索的に試みてみる。

## II. 研究1；着席行動の特性に関する自然観察

まず、公共の場における自然な着席行動にいかなる特徴がみられるか、不介入の観察を行なってみた。

### 1. 方法

**観察対象** 学生数4,300で、男女比は丁度2：1の地方国立大学（島根大学）生で、大学図書館およびカフェテリア（軽食喫茶部）の利用者、計383グループ。内訳は表1に示す。

表1 観察対象者（グループ数）

	図 書 館					カ フ ェ テ リ ア				
	計	1人	2人	3人	4人以上	計	1人	2人	3人	4人以上
男	191	169	17	4	1	65	37	14	9	5
女	102	86	9	4	3	10	2	5	2	5
混 合	4	0	4	0	0	11	0	6	1	4
計	297	255	30	8	4	86	39	25	12	10

**観察時間** 1991年5月の20日間。図書館は10時から12時までと14時から16時まで、カフェテリアは混雑する昼休み時を過ぎた13時30分から14時まで。

**観察場所** 図書館は1階と2階の閲覧室。ここには図1に示す4人掛けA（衝立て付き、29台）と同B（衝立て無し、30台）および1

人掛けC（5台）の3タイプの、かなりゆったりとしたテーブルがある。

一方カフェテリアには、4人掛け27台、6人掛け10台、8人掛け15台の、比較的窮屈な3種類のテーブルがある（図2参照）。

**手続き** 教育心理学専攻の女子学生4人が観察者となり、利用者の着席のパターンを、

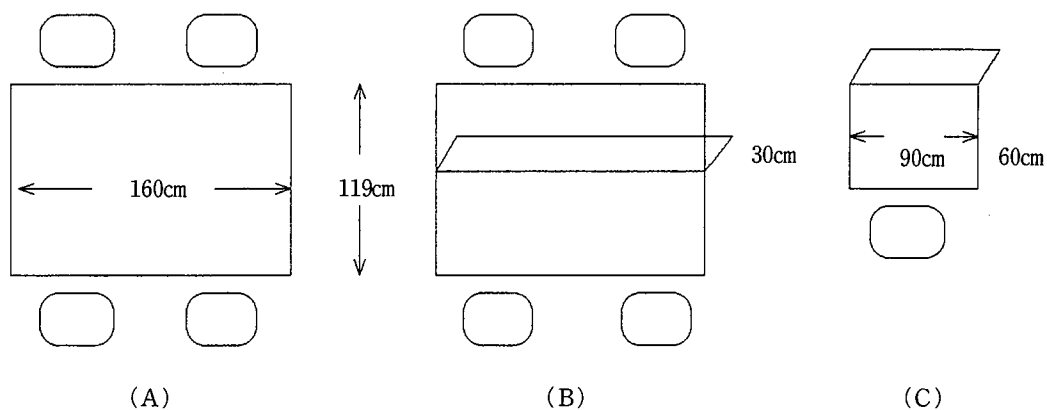


図1 図書館のテーブルの形態

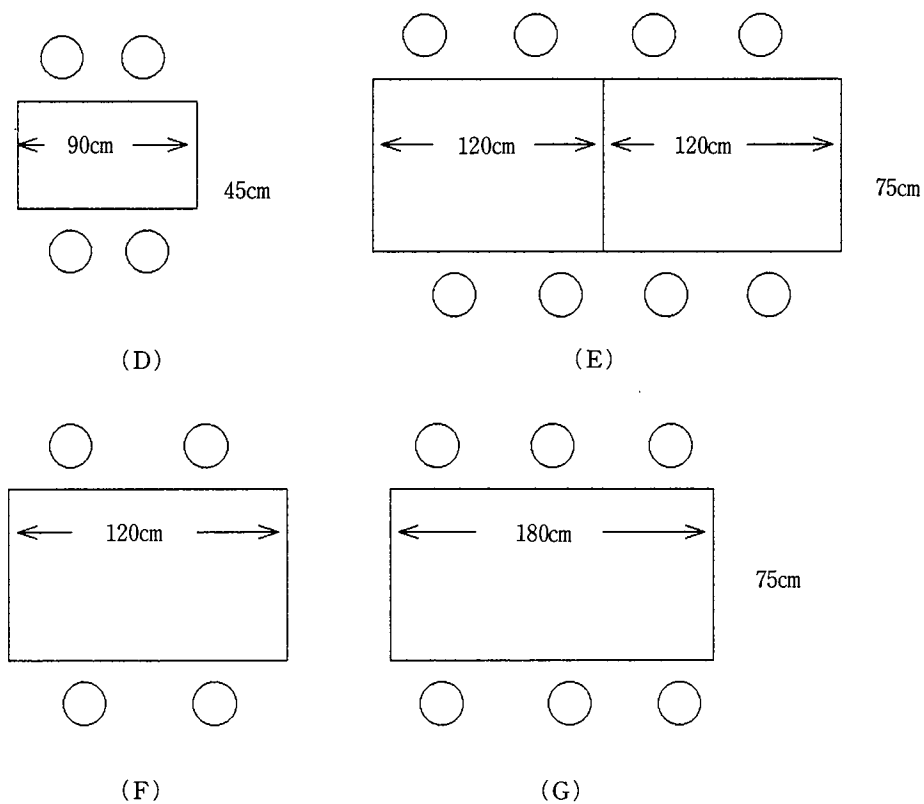


図2 カフェテラスのテーブル形態

距離をにおいて観察する。取り扱う独立変数は、観察対象グループの性、人数、テーブルのタイプの3変数、従属変数は仲間との着席位置関係、他者との位置関係、持ち物 (barrier)

の位置の3変数、計6変数である。

## 2. 結果と考察

**単独利用者** 図書館では主たる利用目的が学習であるためか、1人での利用者が86% (男

性で89%，女性で84%）と非常に多いのに対し，食事だけでなく談笑をも目的とするカフェテリアではそれが45%と半数を割り，2人から4人のグループが51%とやや多い（表1）。

この単独利用者のテーブルに他の人が着席することは稀で，図書館で衝立て無しの場合

では皆無，衝立てがあっても20%で，それも2例を除きほとんどが斜め前方と，できるだけ距離をおいて座っていた。カフェテリアにおいても同様で，1例を除く他のすべてが1人で1テーブルを占有していたことになる。いずれの場合も単独利用者の正面に他人が位置することは皆無であった（表2）。

表2 単独利用者の、他者との位置関係（人数）

	図 書 館					カ フ ェ テ リ ア				
	正面	隣	斜め前方	1人	計	正面	隣	斜め前方	1人	計
男	0	0	25	144	169	0	0	1	36	37
女	0	2	27	57	86	0	0	0	2	2
計	0	2	52	201	255	0	0	1	38	39

なお，図書館での単独利用者は複数グループに比べ，衝立て無しより衝立てのあるテーブルを選ぶ傾向が高い（ $x^2=20.87$ ， $df=1,3$ ， $p<.01$ ，表3参照）。後述のように，高さ30cmの衝立てが独立した空間を形成するとみなしうるならば，実に全体の9割において1人が1空間を占有していることとなり，テーブル数に余裕のあるかぎり，1つのテーブル全体にまで広がった個人空間を，互いに侵すまい，侵されまいという傾向，総じて他者との接近を回避しようとする一般的傾向がうか

がわれる。

**仲間との着席位置関係** まず，図書館で全体の10%，カフェテリアで29%の計55例の2人連れの場合をみてみよう。当然ながら彼らは，1人の時とは対照的に，ほとんど(96%)が正面ないし隣という近接した席を選んでいる。男女混合ペアを除いて男女の違いをみると，男性は女性に比べ，隣より正面を選ぶ傾向が強いことが分かる（ $x^2=9.74$ ，表4）。3人以上のグループでは（主としてカフェテリアとなるが），その両方へ分散するのはいうまでもない。

**他人との着席位置関係** 前述のように，カフェテリアでは見知らぬ他者同士が同席する

表3 グループ人数によるテーブル選択の差違（図書館利用者）

	衝立て有り	衝立て無し	計
1人	163	92	255
2人	15	15	30
3人	0	8	8
4人以上	0	4	4
計	178	119	297

$x^2(3) = 20.87^{**}$

表4 2人連れの着席位置関係

	対面	隣	その他	計
男	18	12	1	31
女	6	8	0	14
男女	5	4	1	10
計	29	24	2	55

ことはほとんど無く、図書館の衝立て無しのテーブルでもまた同様であったが、図書館の衝立て付きテーブルの場合は少々趣が異なる(表5)。わずか高さ30cmの衝立てではあるが、それがあるだけである程度空間の独立化がもたらされ、他人同士が同席する割合も全体の3分の1と他に比べ多くなる。しかしそれでもなお、その多くが(2例を除き)衝立てをはさんで斜め前方に位置し、他人とは可能な限り最大の距離を置く傾向が認められた。

表5 他人との着席位置関係(図書館、衝立て付きテーブル)

	正面	隣	斜め前方	1人	計
男	0	0	27	88	115
女	0	2	28	31	61
混合	0	0	1	1	2
計	0	2	56	120	178

**障壁としての持ち物の位置** 全体的に見て、持ち物を置く位置は側方が45%と、前方の5%に比べずっと多く、性差は見られなかった(表6)。これを図書館の衝立て無しのテーブルでの単独利用者に限っても、側方の59%に対し前方の13%とそれほど変化せず、無意識のうちに置く障壁としての持ち物の位置は、男女共に横のほうが多く、性差はみられない。これは単に物理的に置きやすいか否かにのみ規定された結果に過ぎないということかも知

表6 障壁としての持ち物の位置(図書館、カフェテリアの合計)

	正面	隣	斜め前方	1人	計
男	12	110	7	127	256
女	6	60	6	40	112
混合	1	1	0	13	15
計	19	171	13	180	383

れない。

複数の者の着席の布置については、一般に相互の関係が協同的であれば隣に、競争的であれば正面に、そして独立的であれば斜め前方にとることが多いといわれている(Sommer, 1969)。

混雑時を避けたためか、今回の観察結果は男女を問わず全体として、お互いの個人空間を侵すのを回避すべく可能な限り最大の距離をとるというプライバシー保持志向を抽出するにとどまり、Fisherらのような性による個人空間の方向性の違い、特に正面と側面の差は、出現頻度の少なさもあって確認されなかった。ただ、見知らぬ者同士が向かい合って位置することが、衝立て付きのテーブルを除き皆無であったのは注目すべきことかもしれない。個人空間は単に物理的距離によってだけでなく、それ以上に身体の方角性、特に視線の交錯の可能性に規定されることが示唆されているからである。

では、実際に自己の空間が侵された場合には、一体いかなる心理過程が生起するのだろうか。自然観察では限界がある、このような内的、感情的過程について、個人空間への意図的な侵害に対する反応を通してアプローチしてみる。

### III. 研究2 ; 個人空間への侵入実験

今回の研究の主たる関心は、個人空間の交錯する場面での心理的、感情的過程にある。Fisherらのように、本当に男性は正面からの侵入に、女性は側面からの侵入により脅威を感じるのか、図書館というフィールドにおいてこれを実験的に検証してみる。なお、侵入者の性の要因は、Fisherらの結果でも効

果をもたなかったため、実験計画の簡略化の意味もあって割愛する。

1. 方 法

**被験者** 研究1の観察対象者のうち、大学図書館の閲覧室で、4人掛けのテーブル（図1, B）を1人で利用している男性30名、女性18名の計48名。

**侵入者** 研究1の観察者と同じ、教育心理学専攻の女子学生4名が、交替でこれにあたる。

**手続き** Fisherらと同様に、1人で学習中の被験者のテーブルの定められた位置に、近くの棚から本を携えてきた侵入者が着席し、5分間ほど本を読んで退席する。この間具体的相互作用は一切行なわない。侵入者の座る

位置は、被験者の隣あるいは正面のいずれかである。

侵入者が立ち去った後で、これとは別の実験者が被験者に対し、教育心理研究室の学生として自己紹介をし、簡単な質問紙に対する無記名での回答を依頼する。

質問項目は、Fisherらのものを参考にしながら、これを大きく修正、削除して、最終的に、落ち着ける—落ち着かない、快適な—不快な、など、被験者の感情状態の自己認知に関する質問項目9、無礼な—礼儀正しい、感じが良い—悪いなど、侵入者の印象に関する対象認知項目8の計17項目の、7ポイントの両極性尺度から構成された質問紙を用いる。

表7 各質問項目に対する評定の平均値

質問項目	全被験者平均	性 (A)	
		男	女
その人が気になった—気にならなかった	4.27 (1.62)	4.13 (1.76)	4.50
愉快な—不愉快な	3.94 (0.67)	4.10 (0.48)	3.67
安心な—不安な	3.96 (0.68)	4.00 (0.79)	3.89
ゆったりした—窮屈な	3.46 (1.03)	3.43 (1.10)	3.50
落ち着ける—落ち着かない	3.67 (1.12)	3.60 (1.19)	3.78
静かな—騒がしい	4.94 (1.26)	4.97 (1.27)	4.89
明るい雰囲気—暗い雰囲気	4.06 (0.63)	4.10 (0.66)	4.00
作業に集中できる—気が散る	4.08 (1.27)	4.03 (1.16)	4.17
快適な—不快な	4.04 (0.87)	4.13 (0.78)	3.89
以上 8 項目 計		32.37 (4.91)	31.78
礼儀正しい—無礼な	4.04 (0.97)	4.13 (1.01)	3.89
魅力的な—魅力がない	4.21 (0.58)	4.27 (0.64)	4.11
親しみを感じる—近寄り難い	4.06 (0.76)	3.93 (0.87)	4.28
話をしてもよい—話をしたくない	4.29 (0.99)	4.37 (0.76)	4.17
まじめそうな人—ふまじめそうな人	4.79 (1.22)	4.97 (1.22)	4.50
愛想がいい—無愛想な	4.04 (0.77)	4.00 (0.87)	4.11
感じがよい—悪い	4.17 (1.06)	4.10 (0.99)	4.28
暖かい—冷たい	4.08 (0.58)	4.00 (0.59)	4.22
以上 8 項目 計		33.77 (4.00)	33.56

## 2. 結果と考察

予備的な質問によれば、侵入者の接近に気がつかなかった被験者はおらず、みなかなり早い段階で侵入者には気付いていた。

被験者の質問紙上の反応を、全員の平均値からみて目につく傾向は、侵入によって静けさが破られたと感じたわけではないが（評定平均4.94）、やや窮屈で（3.46）、落ち着けない（3.67）思いをしていることぐらいで、全体に中性的な反応がめだち、平均値も4前後に、しかも小さな分散で集中している。

次に、項目のそれぞれについて、被験者の性×侵入者の位置の、2×2の独立した2要因の分散分析を行なってみた（表7）。その結

果、次の項目で有意差が見いだされた。

まず被験者の感情状態については、不安感  
は正面より隣に座られたほうが高かった（ $F=5.50$ ,  $df=1,44$ ,  $p<.05$ ）。落ち着けない度  
合いも隣の方が高かった（ $F=6.96$ ,  $p<.05$ ）。また、不愉快さは女性の被験者のほ  
うがより強く感じていた（ $F=5.50$ ,  $p<.05$ ）。感情項目の合計でも、正面より隣に  
座られるほうがより否定的反応を引き起こす  
傾向にあった（ $F=3.65$ ,  $p<.10$ ）。

侵入者に対する印象の項目でも、隣より正  
面のほうがより感じよく（ $F=6.96$ ,  $p<.05$ ）、やや魅力的で、親しみやすく見られ  
る傾向にあった（ $F=3.47$ ,  $p<.10$ ）。印象項

（標準偏差）および2要因分散分析の結果

	侵入位置 (B)				F 値		
	正面		隣		性 (A)	侵入位置 (B)	交互作用 (A*B)
(1.38)	4.39	(1.54)	4.06	(1.78)	n s	n s	n s
(0.84)	4.06	(0.51)	3.71	(0.85)	5.5040*	3.6792+	n s
(0.47)	4.13	(0.50)	3.65	(0.86)	n s	5.8225*	n s
(0.92)	3.58	(0.99)	3.24	(1.09)	n s	n s	n s
(1.00)	3.97	(1.05)	3.12	(1.05)	n s	6.9629*	n s
(1.28)	4.94	(1.29)	4.94	(1.25)	n s	n s	n s
(0.59)	4.10	(0.54)	4.00	(0.79)	n s	n s	n s
(1.47)	4.23	(1.20)	3.82	(1.38)	n s	n s	n s
(1.02)	4.13	(0.81)	3.88	(0.99)	n s	n s	n s
(4.88)	33.13	(4.40)	30.35	(5.27)	n s	3.6494+	n s
(0.90)	4.13	(0.72)	3.88	(1.32)	n s	n s	n s
(0.47)	4.32	(0.65)	4.00	(0.35)	n s	3.4695+	n s
(0.46)	4.19	(0.54)	3.82	(1.01)	n s	2.9188+	n s
(1.29)	4.32	(0.98)	4.24	(1.03)	n s	n s	n s
(1.20)	4.87	(1.09)	4.65	(1.46)	n s	n s	n s
(0.58)	4.16	(0.69)	3.82	(0.88)	n s	n s	n s
(1.18)	4.45	(0.68)	3.65	(1.41)	n s	6.9607*	n s
(0.55)	4.10	(0.65)	4.06	(0.43)	n s	n s	n s
(4.22)	34.55	(3.06)	32.12	(5.12)	n s	4.0745+	n s

\*:  $p<.05$ , +:  $p<.10$

目合計でも、正面より隣に対しより否定的な反応を示す傾向がうかがわれた( $F=4.07$ ,  $p < .10$ )。

全体として今回の被験者は、前方からの侵入に対してはそれほどではないが、側面からの侵入には否定的な反応を示す傾向がみられたといえよう。しかし性差はほとんどみられず、性と位置との交互作用もいずれの項目でも有意ではなかった。つまり、少なくとも侵入者が女性の場合、被験者が男性(即ち異性)であろうと女性(同性)であろうと反応にそれほど差はなく、また男女によって、侵入位置に対する反応が異なることも確認するには至らなかったことになる。

全体的な反応傾向を比較すると、自己の空間が侵されるにもかかわらず、Fisherらの被験者が、一般に侵入に対し比較的肯定的な反応を示していた、即ち見知らぬ他者の接近をむしろ歓迎気味であったのに対し、今回の被験者では「どちらともいえぬ」という中性的反応が多いのが目立ち、したがって平均値も中点(4)前後に、比較的小さな分散で集中していた。実験者の印象では、この反応の多くは純粋な中性反応というより、むしろこのような実験の介入自体に対する被験者の当惑や抵抗感の表われであって、それが嫌悪感にまで至らなかったのは、単に侵入者が女性であったからにすぎなかったとも思われる。

Fisherらの結果では一貫してみとめられた侵入者の性と位置との交互作用が、本研究ではまったく確認できなかった点もまた、サンプル数そのものが少なすぎたことに加え、今回の被験者がこのように中性的反応に終始し、実験条件に対する反応の分化が少なかったことによるのかも知れない。その意味では、Fisherらの主張をこれだけで否定するのは早

計であろう。

ただ、このような被験者数の少なさや、実験そのものに対する被験者の抵抗感を越えて、なおかつ全般に正面より側面からの侵入に否定的反応を示す傾向がみられたのは注目値する。この傾向をFisherらのアメリカ人学生に比較するというならば、今回の日本の男子学生は個人空間の侵入に対して、相対的に「女性的」な反応を示したことになるからである。このことは、もしこのような一般化が許されるならばだが、従来からあった日本文化論、例えば河合(1976)の「母性社会日本論」などと方向を一にする結果ともみることができよう。この点を含めて、更なる検討が必要とされる。

## 参考文献

- Baxter, J. 1970 Interpersonal spacing in natural settings. *Sociometry*, 90, 213-219.
- Fisher, J. I. & Byrne, D. 1975 Too close for comfort: Sex differences in response to invasions of personal space. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, 32, 15-21.
- Hall, E. T. 1966 *The hidden dimension*. New York: Doubleday. 日高敏隆・佐藤信行(訳)  
1970 かくれた次元 みすず書房
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- 渋谷昌三 1990 人と人との快適距離—パーソナル・スペースとは何か 日本放送出版協会
- Sommer, R. 1959, Studies in personal space. *Sociometry*, 22, 247-260.
- Sommer, R. 1969, *Personal space: The behavioral basis of design*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall. 種山定登(訳) 1972, 人間の空間—デザインの行動的研究 鹿島出版会